

第30回

読書感想文 コンクール



作品集 2016

利尻富士町立鬼脇公民館

第三十回 読書感想文コンクール作品集の発刊にあたって

利尻富士町教育委員会

教育長 石川 武 弘

この「読書感想文コンクール作品集」は、昭和六十二年に発行されて以来、今年で節目の三十回を数えるまでになりました。今回のコンクールには、小学生百四十六編、中学生六十一編、合計二百七編の応募を頂き、その中から優秀作などに輝いた作品二十四編を一冊にまとめました。

応募いただいた作品には、それぞれ一冊の本を深く読んで感じたこと・思ったこと・連想したことを自分の言葉で力強く素直に表現しており、内容的にも優劣がつけがたく、選考に当たられた審査員の先生方も、本当にご苦労されたことと思います。

現代社会の象徴として、ネットやスマホ、ゲームなど手軽に調べ・遊べる機器の発達により、社会全体の活字離れが叫ばれております。子どもたちが、読書を通じて書かれた内容を読み解き、自分自身で考え理解することは、将来に必ず役立つ経験となります。

今後もコンクールを通じて、利尻富士町の子どもたちが読書好きになるよう、教育委員会としても事業内容の充実を図るとともに、この作品集が、町民の方々をはじめ、より多くの方々に読んでいただけることを願っています。

おわりに、時節柄ご多忙のなか審査に当たられた先生方をはじめ関係各位に心から感謝申し上げますとともに、今後とも多くの子どもたちの個性、可能性を引き出すため、読書活動の推進に尽力いただきますようお願い申し上げます、発刊のことばといたします。



【作品集 目次】

小学校一学年の部

☆ 優秀作

「アユアユ」

利尻小学校 一年 さわた なみ …… 6

★ 佳作

「ちがいのほしごと エジプト」

利尻小学校 一年 かむむら えいた …… 6

「じゅんね ともだち」

鷺泊小学校 一年 あまなひ はやと …… 7

★ 奨励賞

「からすのパンせむと」

鷺泊小学校 一年 なかはた りのん …… 8

「ゆるかじがっせん」

鷺泊小学校 一年 くろかわ ゆうな …… 8



小学校二学年の部

☆ 優秀作

「水玉のたび」を読んで

鷺泊小学校 一年 秋葉 真衣 …… 9

★ 佳作

「野原のたんじょう日会」

鷺泊小学校 一年 天内 友陽 …… 10

「おぼけのケーキせむと」

利尻小学校 一年 河越 姫花 …… 11

★ 奨励賞

「まぼろしパート」を読んで

鷺泊小学校 一年 酒井 綾乃 …… 11

小学校三学年の部

☆ 優秀作

「長〜ノートのジュン」を読んで

鷺泊小学校 三年 安達 香奈・・・12

★ 佳作

「一番おごちやわいしうなのぼん」

利尻小学校 三年 永井 瀬士・・・13

「だぬきのぢやひちゃん」を読んで

鷺泊小学校 三年 近江 優翔・・・14

★ 奨励賞

「教室はまがしつ所だ」を読んで

鷺泊小学校 三年 渡辺 拓斗・・・15

小学校四学年の部

☆ 優秀作

「やがや町」を読んで

鷺泊小学校 四年 杉本 天音・・・16

★ 佳作

「いとんの大冒険」を読んで

利尻小学校 四年 畠中 悠・・・17

「びりっかすの神様」

鷺泊小学校 四年 入井 大輝・・・18

★ 奨励賞

「リンリンちゃんとワン」天才発明会社」

利尻小学校 四年 西澤 咲雪・・・19

小学校五学年の部

☆ 優秀作

「他の人をほめよう」

利尻小学校 五年 村井 言寧・・・20

★ 佳作

「オオサンショウウオの夏」を読んで

鷺泊小学校 五年 高橋 暖・・・21

「華花さんの新しい家」を読んで

利尻小学校 五年 牧野 海結・・・21

★ 奨励賞

「大地震が学校をおそった」を読んで

鷺泊小学校 五年 松谷 実夢・・・22

小学校六学年の部

☆ 優秀作

「きみが世界を変えるなら」を読んで

鷺泊小学校 六年 杉本 天河・・・23

★ 佳作

「マッチ箱日記」を読んで

利尻小学校 六年 熊谷 申大・・・24

「百年後の水を守る」を読んで

鷺泊小学校 六年 松倉 健登・・・25

★ 奨励賞

「一人じゃないよ」を読んで

鷺泊小学校 六年 神成 燎・・・26

中学校の部

☆ 優秀作

「世界から猫が消えたなら」を読んで

鬼脇中学校 一年 寺島 皿咲 …… 27

「おばあちゃんが教えてくれたこと」

鷺沼中学校 一年 山本 彩心 …… 28

★ 佳作

「仕事オンチな働き者」を読んで

鬼脇中学校 二年 桜庭 ももか …… 29

「西の魔女が死んだ」を読んで

鬼脇中学校 二年 門脇 あかね …… 30

「明日への一歩」

鬼脇中学校 一年 箕輪 萌華 …… 31

「戦争がなかったら」を読んで

鷺沼中学校 二年 蛸島 菜奈子 …… 33

「ありのままの自分」

鷺沼中学校 一年 渡邊 野乃 …… 34

★ 奨励賞

「リリットの涙」を読んで

鬼脇中学校 一年 小野寺 百花 …… 35

「シリョクケンサ」を読んで

鷺沼中学校 二年 山本 奈央 …… 36



小学校一年生の部

優秀作

「アハハハ」

りりり小学校 一年 さわだ なみ



わたしがこのほんをえらんだのは、こみだるうのえほんがすきで、よんでいないのを、みつけたからです。

こみだるうのえほんがすきなわけは、「こみだるうがおもしろいほんをつくってくれるから」。

このほんのおもしろかったところが、ブルトナーザーがそらをとんでこみだるうにわにびつかったところなんです。

いわからだっしゅつしたところが、よかったです。

わたしが、このおはなしのブルトナーザーだったら、ちょっとやばそう。

こみだるうにこみだるうのえほんがたい入んだから。

ブルトナーザーのおとがドファンラとか、けんぼんのおんぶみだいだった。さかみちのブルトナーザーのおとは、ドミミのおとです。おとにあわせて、ところが、がたがたりして

いた。
このブルトナーザーは、そらをとんでびつかって、でもあきらめないでほることにした。ほってほって、やっとだっしゅつできた。そしてしゅつりしてまたさいしゅにもどったけど、まだ、じいをおこすとおもって。



こみだるう

ブルトナーザーがドミミの音を出しながら走ったり、道路がガタガタしたりしてびっくりしてもおもしろいお話ですね。奈実さんの作品は、自分の気持ちを入れながら、そのおもしろさを十分に伝えることができている。五味太郎さんの本が好きだという理由も納得です。いわからも他の作品を見つけて読んで下さいね。

★ 佳作

「せかいのはでって どこですか」

りりり小学校 一年 かむむら えいた



ほくは、せかいのはてをしらたかったから、このほんをよみました。

かえるが、いびからびびだして、ほっけんしたおはなしです。

おはなしのせかいで、かえるともだちができて、よかったです。

せかいのはてはみつからなかった。でもともだちができてよかったです。

かえるは、いびからびびてからはじめてあったこみだるうのおはなしでびっくり。ゆっきがあるな、とおもった。

ほくも、いどのなかにひとりでいるのは、いやです。ともだちがいなくて、ひとりでいるのはさびしいからです。ほくも、ゆうきをだして、ともだちになろうよといっています。かえるくん、ともだちができてよかったですね。



じじひょう

かえるくんにお友達^{ともだち}ができて良かったですね。瑛太^{えいた}くんが世界^{せかい}のはてがどうなっているのかワクワクしながら読んでいます。目が浮^うかびます。一人^{ひとり}でいる時のさびしさ、かえるくんにお友達^{ともだち}ができた時の喜び^{よろこび}など、本^{ほん}を読みながら感じた気持ち^{きもち}がよく伝わ^{つた}ってきました。

★ 佳作^{かきく}

「じめえね とよだち」

おじよまの小学校 一年 あまなひ はやと



ほくのこころにのこったのは、なかよしのきつねとおおかみが、けんかをしてなかなかおりのこころです。

きつねもおおかみも、なかなかおりのこころでも、「じめえね」となかなかいえず、かなしそうでした。そして、きつねのなみだがありにおちたとき、「じめえね。」と泣きました。それをきいていたおおかみも、すなおにあやまり、なかなかおりのこころでした。

ほくもすなおに、「じめえね、といえないうきがありません。かすかかったり、ゆるりてもらえなかつたら、よおせつていよう、ごんごんいえずなうなうしてしまいます。あやまるじいとは、とてもゆうきがいらぬじいだとおもいます。

ほくは、このほんをよんで、ともだちとけんかしたり、すく、「じめえね、といえようになりたいとおもいました。そして、ともだちをだいにじいにしていきます。



じじひょう

はやとくんの作品^{さくひん}は、きつねとおおかみの関係^{かんけい}を上手^{うまい}に伝えていますね。主人公^{しゅじんこう}と自分を描^かいて読んでいくのも素敵^{すてき}です。「じめえね」と素直^{すなお}に言^いえない時の気持ち^{きもち}は、きつねとよだちのさあめをだいたいおもうと思います。はやとくは、この本^{ほん}を讀^よんできつねとよだち「じめえね」と言^いったり、友達^{ともだち}を大切にしようとするんだなと心^{こころ}を感^{かん}じさせてくれました。

★ 奨励賞
しょうりじやうじやう

「からすのパンやさん」



おじじまり小学校 一年 なかはた りのん

わたしがこのほんをえらんだの理由は、おねえちゃんがすきなほんだからです。

これは、いずみがもりのからすのはたらきもののおじじまりとおかあさんと、あか、しろ、きいろ、ちやいろのおじじまりたちのおはなしです。

あかちゃんからすのおせわで、パンをこがしたりして、だんだんびんぼうになってしまいました。わたしは、かなしいきもちになりました。

うれないパンは、じじもたちのおやつになりました。おともだちがそのパンをたべておいしかったのでかいいいへんくそくをしました。

そのへんくそくが、たいへんなむねになりました。はなしをききつけたからすたちがいっせいにパンやさんへとんでいきました。

おもしろかったのは、パンがやけたことをパンやさんがやけたとおもったからすが、しょうぼうじでんわをしてしまったことですよ。

パンやさんへへんとぶらぶらしたせいかパンをかってかえり、まちでひょうぼうのパンやさんになりました。

じいばいじいでも、いっしょけんめいはたらいてくれるじい

いっじいがあるんだとおもいました。



じじひょう

カラスの親子の様子やパン屋さんでの出来事をわかりやすく書くことができましたね。本を読みながら、りんのさんがお話の中にあるような気持ちにさせられる感想文です。いろいろな大変なことがあったけど、「一生けんめい働いてくれるじいじいがあるんだな」とりんのさんの言葉がとっても素敵です。

★ 奨励賞
しょうりじやうじやう

「ねむがじいさん」



おじじまり小学校 一年 くらかわ ゆうな

わたしは、ほいくじのびきでやったほんをみました。

わるいじいをしたねむぎ、みんなでやっつけるとじいさんが、おもしろかったです。

小学校二学年の部

☆ 優秀作

「水玉のたび」を読んで

鷺泊小学校 二年

秋葉 真衣



くりが、いそりからはじめて、みるにおおやけどをさせた
り、はちが、さるのおしりをぶすりととせしたり、うすが、や
ねからとびおりて、おさえつけました。さるは、こつえんし
てはんせいしました。わたしは、それをよんで、すっきりし
ました。
わるいことをしたらだめだし、ともだちをおもいやるま
ちが、とてもだいじだとおもいました。

じつひょう

自分がやった劇を本で読んでみようと思う心は素敵ですね。
悪いことをしたさるがこつえんして、反省したことを「すっきり
した」と書いたゆづなさんの気持ちがわかるような気がします。
読書を通じて、「悪いことをしたらだめ」「友達を思いやる気持ち
がとても大事」だといふことを学べたことも良かったです。



わたしが、この本をえらんだだけは、ひょう紙のネコが、かわ
いかったのでどんなお話かなと気になったので読むことにしまし
た。読んでみるとネコのお話ではなく水のお話でした。
わたしが心にのこったのは、水は色いろなかたちになってわた
しのまわりにあることです。あと水は人間が生活するためだけ
でなく、ごうびつや草や花も生きるために、ひつようなのだとし
りました。
この本を読んで、水玉は、あたたまるときえて、つめたくなる
と雨や雪になって、そして花や虫にやくだち目には見えないけど
クルクルまわっているのだなとびっくらしました。
いつもあたり前のようにじゃ口から出してつかっている水を大
切にしようと思いました。



じつひょうじつ

この本と出逢い、水にひびいて深く考えることができましたね。水は「うろこ」の形になつて「うろこ」人間だけでなく、生き物すべてに水は必要だといふこと、など、新たな発見や不思議さを感じたいと思います。読書を通して、面白く発見、不思議な出来事などが読書の魅力ですね。これからまたたくさん出逢いましょうね。

★ 佳作

「野原のたんじょう会」



鷺沼小学校 二年 天内 友陽

わたしは、ウサギのフロレンスの本をよみました。この本は、友だちがフロレンスのためにこっそり野原でのたんじょう会の計画をたてて、よるにはお話しです。

友だちがこっそりお手紙をまわしていたり、ないしょの話をしていたり、一人ぼっちにされたりして、フロレンスが、なか間はすれだと思って、かなしくなりました。わたしも同じふうにされたらかなしくてなみだがでちやいます。

でも、のはらで友だちみんながたんじょう会をしてくれた場めん、なか間はすれだと思っていたことが、ぜんぶかんちがいだとわかりました。そして、フロレンスがしあわせになるので、わ

たしは、この場めんがーばんすきです。

この本を読んで、大切だと思ったことは、だれかのために、力を合わせるじつです。どうしてかと言つと、あの手がうれしくなったり、しあわせな気持ちになって、わたしもうれしくなるからです。

わたしはナタリーののように、友だちやかぞへに、すきなものをいっしょにひいてあげたいです。

じつひょうじつ

ゆうひさんが主人公の気持ちにたよりそって読書してゐるのがよく伝わってきました。ゆうひさんが思った「だれかのため」力を合わせるじつは、とっても大切なじつですね。相手がうれしくなれば、自分もうれしくなるじつじつを、この本を通して感じることができたゆうひさんは素敵です。



★ 佳作

「おばけのケーキやさん」

利尻小学校 二年 河越 姫花



この本をえらんだだけは、おばけの本がすきだからです。お話の内容はおばけがケーキやさんをひらいてたとき、おばけじゃない子が入ってきておばけが作ったケーキをあげるお話です。このお話をよんで心のこったことは、女の子がけっこんするところなんです。ゆゆうは、おばけがたのまれていないのに女の子のけっこんしきにケーキをあげたからすてきだと思いました。もしこのお話のしゅじんこうだったら、もうすこし女の子といっしょにいたいと思います。だからわたしは、女の子といっしょにおみせにおとまりします。この本をよんで大切だなあと考えたことは、女の子がけっこんするときにきこえることを思いだしなからケーキをおもいをこめてさくらいまであきらめずにとどけたところなんです。わたしもおばけといっしょであきらめずにかんばりたいです。



じゅうひゅう

おばけがたのまれていないのに、女の子の結婚式にケーキをあげたから素敵ですと思っことかできた姫花さんが素敵ですね。登場人物の気持ちをきちんと感じながら読み進めているところがとても良いです。姫花さんなら、何でもあきらめずに、最後までがんばり続けるんだろうなと感じせられました。

★ 奨励賞

「まほうパーティ」をよんで

鷺泊小学校 二年 酒井 綾乃



わたしがこの本をえらんだだけは、夜ねるときによんでいておもしろいと思ったからです。わたしが一番すきなところは、おし入れの中にできたまほうパーティをおじいちゃんがりよこのおみやげにケンタにあげたことです。本の中で一番すきな人はハルカちゃんです。ハルカちゃんはパリエをならっていて、べんきようするじかんがないけど、わたしはやりたいことが多すぎて、べんきようするじかんがないところがにっています。

この本をよんだあととても大切だなと思ったことは、ケンタク

んはまほうのメガネにたよってばんきょうをしないでテストをう
けたけど、ハルカちゃんは自分の力で百てんをとったところが大
切だなと思います。

わたしは毎日ばんきょうをこつこつとやっています。

じじひきん

主人公と自分と書ねわらせて読書こつこつとやるのが良いですね。習い

事や勉強はじじひがまわって、勉強する時間がないでも、自分の力で毎

日勉強するじじひがああなのなんもハルカちゃんも立派ですね。感想文を

通して、ああなのなんも、読んだ家だと思つておめでとう。



小学校三年生の部

★ 優秀作

「長く伸びたのピッピ」を讀んで

鷺泊小学校 三年 安達 香奈



私がなぜこの本をえらんだのかと言いつつ、「しじひ」船やちの木の
表紙を見ておもしろそうだなと思ったからです。「しじひ」、私のお父さん
が昔々昔々したピッピの歌を聞いたことがあったので、えらびました。
「長く伸びたのピッピ」はいいお話でした。

ピッピは母はまわの二軒家です。女の子。毛はほんごんの色で左右には
ねだツインテール。いつもちがう色の長く伸びたツバカフカのくつをはい
ています。ピッピの家は思ひやみのニルンくんだけ。お母さんは
亡くなっていて、お父さんはどこかへ行っちゃいました。トミーとア
ンニカと友達になってからたまに学校に行くようになります。学校で
は、お金持ちのルーセンプルムおばさんが口頭試問に来て、答えられな
い子ども達には金をあたえずに、泣かせていたので、子ども達からき
らわれていました。でもピッピはしじひ問には真面目に答えず、反こうし
ました。私はルーセンプルムおばさんの勉強が出来る子にしか金をあげ
ない所がひどいと思います。ピッピはいばったわるい大人をころしめ
るという、ふじつの子どもには出来ない事をしてめづきがあると思いま
した。しじひがピッピの家に入って来た時はつかまえたごぼろぼうとい
うしじひのおひきをおびつた後に、「お金をわたしてにがしてあげました。
私はピッピがなほしきにながしてあげてやさいな」と思いました。そいつ、
ピッピはめづつかたでノーモアがあり、自由な発想をする人だと思っています。

心にとった所は、ピッピをむかえに来たお父さんにピッピが、「一人でもあたしのためになんして泣く人がいるってこと、あたしにはがまんできないの。トミーとアンニカならなおさらよ。」

と書いて一人でのこることを決めた所です。ピッピは友達を大切にする人だと思いました。大人がいなくても一人でくまらしていいピッピは、勉強が出来なくても強くてかじいと思います。ピッピはいろいろな物を持っていたので、大きくなりたくない人によくきくお薬のと、友達に豆のような物をあげて、お話は終わっていました。だから、私は本当に大人にならないのか気になりました。ピッピはだらめをたくさん言っています。でも、それもみんなよろこばせるためだと思えます。大人はいつも本当の事だけを話さないと言いつけねど、ピッピは子ども達のねがいやゆめをかなえるでたらめを言っているのだと思います。

もし、私の近くにピッピがいて、ピッピがへんな歩き方(後ろ向き)をしていたら、

「なぜへんな歩き方をしているの？」

と声をかけて友達になると思えます。そして、私もピッピと同じように動物が好きなので、さるのニルソン君と遊びたいです。ピッピの歌のように、みんなでゆかいにすごしたいです。



【講評】

香奈さんは、主人公の気持ちをよく理解しながら読み進めていますね。主人公の気持ちと自分の気持ちを素直に表しているところがとても良いです。香奈さんの感想文を讀んでいて「ピッピ」の香奈さんが同じ人物に見えてきました。ピッピのよいところ、ゆめやなごころもアがり、自由な発想の香奈さんめがらに過じつておれ。

★ 佳作

「一番あごやわてしうのGlobe」

利尻小学校 三年 永井 瀬士



ぼくが、この本をえらんだだけは、学校の読書タイムの時間に山本先生がこの本を読んでくれてやさしい気持ちになれたので、読書感想文に書いてみたいと思ったからです。

このお話は、ある日ティラノサウルスがほかの上でタマゴを見つけた。そのタマゴの中からアンキロサウルスの赤ちゃんが生まれました。ティラノサウルスがやさしい言葉をかけて、おせわをして赤ちゃんたちを守ってくれるお話です。ティラノサウルスがたまごを食べようとしたのに、赤ちゃんのパパになってくれてやさしいなと思いました。

この本を読んで心にとった事は、一人一人が大切なちばんで、けどその中でいちばんなんてくらべられないんだよティラノサウルスと言った言葉です。でもぼくは、ケンカをしてしまいます。たとえばボールをもつ人で、「ぼくがやる」「ぼくもやる」と言ってケンカをしてしまいます。そのケンカでまけてくやしかったです。平等なんてすこしも思わなかったです。ケンカしてる相手なんてすこしも大切だと思わない。きえてしまえと思った。そしたらボールが使いほつたのでスッキリする。でもみんながいてくれないと遊ぶことができなくてつまらない。ボールなげてもだれも取ってくれないし、ボールなげてもだれも取ってくれないし、ホームランをうとうとしてだれもなげってくれないからつまらないと思いました。ぼくは、友だちがいなくてつまらない事ばかり

よくなると思います。

ほくはだめきではなうのでほけるよはできなうけど、自分できめたよを一生けんめいやるよはできると思つてがんばります。

そして少しでもまってる人の役にたてる大人になりたいです。



【講評】

おじいちゃんへの思い出を感じて、自分のよき本を出会えるって素敵ですね。おじいちゃんが優翔くんへ思つていたよを感じてるよができたのです。優翔くんがはけてみたい「車」です。その理由がよっても素敵ですね。困っている人の役に立つよ、自分で決めたよを一生けんめいやるよをしっかりとまると思つました。

★ 奨励賞

「教室はまちがう所だ」を読んで



鷺泊小学校 二年 渡辺 拓斗

ほくは、教室はまちがう所だという本を読みました。図書館では母や姉にすすめてわたされたらいいです。

一番心にのこった場面は、教室はまちがうところだ。まちがった意見を言おう、まちがった答えを言おう。という場面です。ほくは、さうしよにううしてまちがったことをするのかなと思ひました。学校は勉強する所なのに、まちがえたらダメと思ひました。でも、この本には、まちがえることをおそれない。まちがえた者をわらうてはいけない。まちがった意見や答えをみんなで話合つことが大切だと書いてありました。

ほくは、手はあげられるけどまちがってたらううしようと思つ時もあります。まちがえたらわらわれれます。反だいに、友だちのことをわらつたこともある。イヤだったし相手にイヤな思ひをさせていました。この本を読んで、学んだことは、まちがえをおそれない。わらうていけない。安心して手をあげてまちがえてもいいというよです。

ほくが、まちがえてだれかが僕を助けてくれたら、だれかがまちがえた時、ほくもいっしよに考えてたすけてあげたいです。



【講評】

まちがえをおそれない。まちがえた者をわらうてはいけない。みんなで話し合つことが大切。この本を読んで、素敵なたを拓斗くんは学んだと思ひます。まちがえたらううしようと思つ自分の気持ちも素直に表現するよができていますね。きっと、この本を出会って、手をあげる勇氣とたすけてあげたいよを胸にまき持つよがたすきたよを感じて、自分のよき本に出会えると思ひます。

小学校四年生の部

★ 優秀作

「わかや町」を読んで



鴛泊小学校 四年 杉本 天音

「わかや町」という不思議なタイトルを見て、私は初め、何がわかやになっっているのかなと思いました。

この本の町の文字は、すべてがわかやさまに書いてあり、家もわかやさまに建っています。子どもがはたらいて、大人が遊びます。お店にいけば物をただでもらい、そのうえ、お金までくれるのです。この本は、そんな楽しい町のお話でした。

主人公のリッキーとアンの兄弟は、さいしょはおどろいていましたが、だんだんわかや町が好きになります。私も、町のようすやくらしがらうのくらしとちがっておももしろくなってきました。

とくに心に残ったのは、小学校の「わかや科」という授業です。私たちは学校で学んだことをおぼえますが、この学校はまったくきまぐれです。わすれることを学ぶのが大切だと言っているのです。

私は、利尻にひっこしてきてはじめてスキー場のロープリフトを見ました。はじめて乗った時に、転んでしまいました。今までとく意だったスキーなのに、もうやりたくないという気持ちになりました。しばらく家で休ませていましたが、練習して乗れるようになる、ロープリフトにのるのも楽しくなり、転んでいけなかった気持ちもわすれてしまいました。

この本のわかや科は、しばしばわすれて前向きになれたら、幸せになれると言っていることを教えてくれている人だと思いました。

また、いやなことをわすれることができれば、世の中の口げんかや争いが少なくなると先生が言っていました。

私は、わる口を言ったことも、言われたこともあります。私は、わる口を言われた時の気持ちをわすれることができません。だからこの先生の意見には反対だと思いました。

私は、わる口を言おうとしている人が「わる口を言おう」と思う気持ちをわすれることが大切だとわかりました。

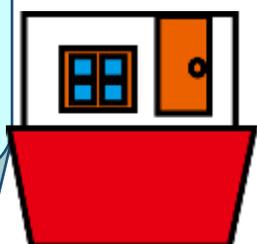
あたり前だと思われることをつたがってみる、わかやさまに考えてみることで、物事には、さまざまな見方があることや、それまで見えなかったことが見えたりすることがある、ということの本は、教えてくれました。だから私も、これからはいろいろな見方をしようと思います。

たとえば、夜くらくなったり、目がわるくならないように電気をつけると、明るくなり、本を読んだり、勉強をすることが出来ます。でも、見方かえると、電気代がともかかります。また勉強すると頭がよくなりますが、勉強をしすぎると目がつかれてしまいます。だから私は勉強をほどほどにしたいと思います。(これはじょうだんですが)

このように私は、いろいろな見方をみにつけていき、明るく、前向きに生きていきたいと思います。

【講評】

とても良い本に出会えたね。そして、本を読んで自分だったらどう考え、前向きに生活していくか作者の意図も読みとれています。
たくさん良い本に出会い、友だちにもしょうかいして下さい。



★ 佳作

「いとんの大冒険」を読んで



利尻小学校 四年 富中 悠
はたけなか ゆう

この本をぼくが選んだわけは、家で時々読んで大冒険の部分がおもしろいと思ったからです。

いとんという子が、ダンデという人から「カナイダネ」という種をもらいます。

ぼくは「カナイダネ」をお金のために使いたいです。

大きくなって、いろいろな家に住みます。三階だてでエレベーターつきです。それに一階から三階までの部屋の数は三十室ある家です。さらに一つの部屋にお手伝いさんつきの家です。そのまたさらにくつをはかせるのが仕事の人や歯みがきをしてあげるのが仕事の人もあります。さらにお風呂は温泉です。だからぼくは「カナイダネ」を使いたいです。

いとんは、カナイダネをこえて、ねがい事を言いました。ねがい通り、ケーキの木が生えていとんは幸せになったと思ったら、友達のプイドルという子が消えてしまいました。ねがい事がかなうと同時に一番大切な物が、なくなります。

ぼくならそれは「いやだなあ。」と思います。なぜなら、いままでずっと遊んでいる友達がいなくなったら悲しいからです。

いとんはオババーニーさんという人に相談するとアンドレ山という山のダンデという怪物につかまってしまったといえます。そこで、いとんがアンドレ山まで一人旅をすることになったのです。いとんは、スイートポテドンを持って旅に出かけました。旅では、コウモリに出会ったり、いかだでたきくたりをしたり、かたいボールのような岩をよけ

たり、とっても細い道を歩いたりしました。いとんは、とってもつらそうだと思う、自分だったら何日も死にそうになって死んでいるかもしれません。

この本で心に残った所は、ダンデの近くでスイートポテドンを急いで食べてスイートポテドンの力でカナイダネを取り、オババーニーさんの所に行ったところです。理由は、怪物の前でふつうに想を言うなんてできる人間はすこしもいないと思うので心に残りました。

もしも、ぼくがいとんだったら、ダンデと戦っているうち、プイドルを助ける方法でいい考えがうかばないと思います。ふつうの人間はできないのに、いとんはできてすごいと思います。

そして、この本を読んで大切だなあと思ったことは、人との助け合いです。なぜかという、いとんは、ずっとプイドルを助けるため友達やオババーニーさんに相談するまでして助け合いを大事にしていたからです。

これから先も、自分のことばかりではなく、友達との友情を深めてこれからもがんばって友達をふやしたり、勉強をがんばります。



【講評】

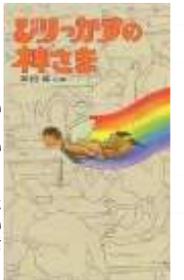
読んだ本のおもしろいところが良くわかりました。

登場人物の気持ちを考えたり、自分だったらと考えることは大事なことです。

★ 佳作

「びりっかすの神様」

鷺泊小学校 四年 入井 大輝



みなさんは、一番になったことがありますか。

一番になったのは簡単なことではないうぼくは思います。でもビリっかすの神様はびりっかすの神様か。一番になるよりはむしろはむずかしいとは思いません。この本はびりっかすの神様が現れたことで、がんばることやきょうしつについて考えさせられる一冊の本でした。

転校してきた四年生の始がすわった席は、成せきの一番悪い人がすわる席でした。その席で成せききょうしつをしてビリっかすになってしまった子の気持ちが集まりそのことでも生まれた神様を見ることができたのです。始はこの神様と話したためわざとビリを取るようになりました。たしかにこの神様にはぼくもきょうしつ味をもちました。始はビリは取りたくないけど話してみたい、という五分五分の気持ちになりました。わざとやった場合、先生の顔がすべつかびました。そしてみんなびりっかすを見たいがためにビリを取り始めました。その結果、クラスに連たい感が生まれました。そんな中、運動会があり本気を出すかわびとビリを取るかになりました。結果的にみんな本気で走り一位になりました。この本を読んで自分のクラスでこのようなことがあった時、自分はじつするかどうかと考えました。こんな神様がいたら楽しい気分になり、わざとやるかもしれない。みんなをきょうしつしてしまうかもしれないと思いました。や

り始めたら、だれか止めてくれる人はいるだろうか。でもビリになって連たい感が出てきたのであれば、自分達の課題の一つである。

「友達同士のトラブルをかい決できるかもしれない。」

「色々な事がいい方向にむかうかもしれない。」

「先生がもししたら喜ぶかもしれない。」

色々な事を考える反面ぶと勝負時にわざと負けられたらと考えたらすくくやしいおこりたくなると思いました。ぼくは剣道をやっているのでよけいにおこると思いました。

この神様は「一人ではずかしいと思うけども、みんなが一つになれば案外むずかしくないんだよ。」

って言うために現れたのかもしれません。

ぼくもこれからは、みんなが一つになることを大切に、友達とたくさんのお話を話して、むずかしいことにもちょうせんしたいです。

【講評】

読む人に問いかけたり、はじめにどんな本か、中では登場人物と自分を比べて、終わりに自分の生活に生かしているという文章の構成が良く書けました。



★ 奨励賞

「リンリンちゃんとワンコ天才発明会社」

利尻小学校 四年 西澤 咲雪



この本の題名に、天才発明と書いてありました。私は、どんな発明なのか、おもこの本について思いました。

このお話に出てくる、リンリンちゃんは、ワンコたちが作った「犬がたロボ」のせいで、家がだんじらだらけになってしまい、リンリンちゃんは、おこって家出てしまっています。

わたしは、ワンコのことかひどいと思いました。リンリンちゃんのことを考えてなかったからです。そして、リンリンちゃんは、プープと会って、いっしょにくらすことになりました。

ある日、プープとリンリンちゃんが川でささびねっこをしていたら、リンリンちゃんがつけていた、プープがはずれて流されてしまいました。リンリンちゃんからそのプープがはずれてしまうと止まってしまう。そのプープをワンコたちもさがします。と中、大くまにつかまって犬なべにされて、食べられそうになっても、さがしつづけました。わたしも家でリコーダーをなくしてしまいました。勉強で使うので、必死にさがしました。

この本を読んで心このったことは、ワンコたちがリンリンちゃんのをさがさして、大へんなことがあっても、リンリンちゃんのためについていっしょけんめいなのです。そして、リンリンちゃんとワンコは、さがし物の大ぼうけんでなかなくなっているよかったですなあと思いました。

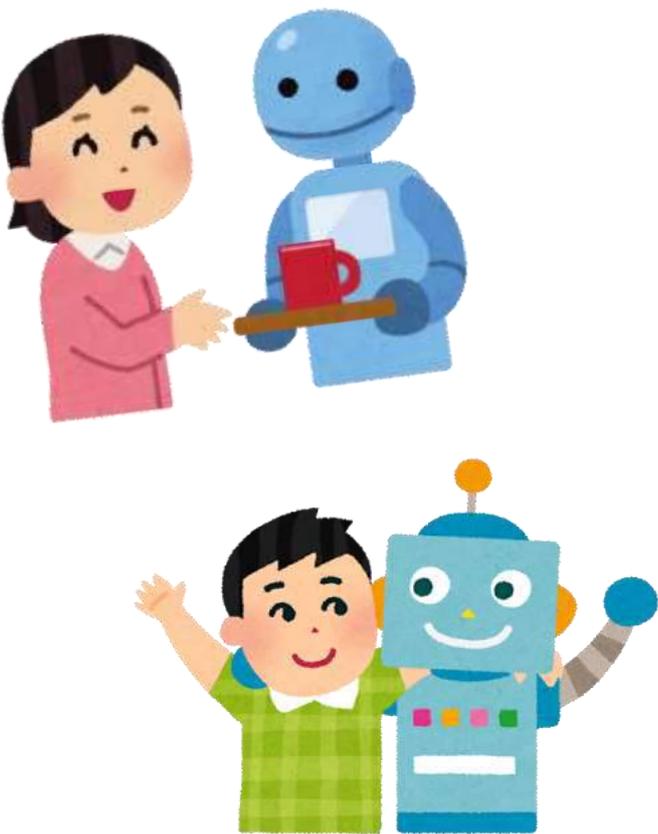
もしもこのお話の主人公だったら、何でも相談機という発明です。勉

強を教えてくれたり、お手伝いをしてくれたり、何でも相談してくれるロボットです。

この本を読んで大切だなと思ったことは、ワンコがリンリンちゃんのをさがすためにいっしょけんめいさがすが大切だと思いました。わたしは、ほとんど、あきらめてしまっけど、ワンコたちみたい、あきらめないようにしたいです。

【講評】

とてもいいねいに読みやすい感想文でした。読みきりかけ、心このったこと、大切だと思ったこと、自分だったらと上手にまとめられています。



小学校五学年の部

☆ 優秀作

「他の人をほめよう」



利尻小学校 五年 村井 言寧

みなぎさんは、読んでいた本を最後まで読めずに続きが気になったことはありませんか？

ぼくは去年、読んでいたシリーズものの本がなかなか手に入らず、その本の続きがとても気になりました。ぼくが選んだ「つづきの図書館」は、こんなことから物語が始まる本です。

主人公のももさんは、新しく司書になったいなかの図書館で、絵本から出てきたはだかの王様や、狼と七匹の子やぎの狼たちと、その王様たちがつづきの知りたい人たちをさがしていきます。そして、王様たちとくわいてくわいにももさんのひっこみじあんだった心も、すこしずつひらいていくようになります。

ぼくがこの本を読んで思ったことは、二つあります。

一つ目は、他の人のいい所を見つけたら、口に出してほめることが大切ということなのです。そう思った場面は、ももさんが、王様の絵をほめた時、

「ごままでも、今と同じように自然にほめることができていれば、これまで出会った人たちとも、すこしは仲よくできたかもしれない。」

と、後悔していたのです。ぼくは去年、道徳の授業で、それぞれのつづきをほめるというのをしました。その時、ほめられてとてもうれしかったので、人はほめられるとうれしくなるんだな。と実感した

ことから、他人のいい所を見つけたらほめる、ということはとても大切だと思っています。

二つ目は、いくら不思議な人たちでも、大切な人なら、いなくなるととてもさびしくなるということなのです。そう思った場面は、王様たちが絵本の中に帰ってしまい、ももさんは王様たちと会えなくなってしまうたという場面です。その時ももさんは、ショックでふさぎこんでしまいました。ぼくは、それは当然だと思います。なぜなら、いままで家族のようになんざいだった人たちが、急にいなくなってしまうたら、だれだつてふさぎこんでしまうと思うからです。ぼくもほいくしよの時に、親友だった友だちがてんきんしてしまっただ時に、とてもショックをつけてしまいました。ももさんも、その時のぼくと同じ気持ちだったと思います。

ももさんは、王様たちとくわいていくなかで、すこしずつ感情を表にだせるようになり、他人をほめることができるようにもなっていきました。ぼくも、これからは他の人のいい所を見つけて、どんどんほめていきたいと思っています。



【講評】

この本を選んだ理由、あらすじ、二つの思ったこと、まとめ、文章構成をよく考えて書きました。自分の経験から登場人物の気持ちに共感し、大切なことが伝わります。

★ 佳作

「オオサンショウウオの夏」を読んで



鴛泊小学校 五年 高橋 たかはし 暖 のん

私がこの本を選んだのには、題名を見て読みたいと思った、夏にぴったりだ、という理由からです。このお話は、主人公「ユウ」となぞの少年「トモ」とのきずなを深めていく物語です。

主人公ユウはつりなどに興味がない、ゲームばかりしている男の子です。そんな時、広島でなぞの少年、トモと出会って…そこから二人の物語が始まります。

読み進むうち、私は、心に残った場面が二つあります。

一つ目は、ユウとトモの出会いです。出会った時ユウはゲームをしていました。その見たことない四角い機械に興味を持ち、興奮していたトモにユウが不思議な気持ちになっていました。「ゲームを知らないのかな」と。

二つ目は、ユウとトモが二人でオオサンショウウオをつる場面です。本当はつってはいけないオオサンショウウオなのに、この場面を読んでいくと、「がんばれ」と言いたくなりしました。この場面で二人の絆がとて深まったと、私は思いました。

このような行動から、毎日ゲームばかりしていたユウも、つりの楽しみを知り、続けることができただんたと思えます。

最後に、私は筆者が伝えたかったことをよく考えました。その結果から、「今まで目を向けなかったことでも、やってみたらけっこうおもしろい、楽しいと思えることがある。」とこの本で学びました。「ぶだんの生活からでも、やってみたいけど、きつと無理だ。」とあきらめている人もいると思います。でも、筆者はきつとこの本を読んで知ったことを、生活にも取り入れてほしい、あきらめないでほしい、と思ったのではないかと思います。だから私もこれからは、やってみたいと思わないけど、一度くらいはやってみよう、とチャレンジすることも大事だと思います。



【講評】
とてもいいなにかいいな字で読みやすかったです。
文章構成も良く、作者の意図も読み取れていました。これからの自分の生活にも生かしたいと思います。

★ 佳作

「華花さんの新しい家」を読んで



利尻小学校 五年 牧野 まきの 海結 みゆ

この本は、十才のまやがおばあちゃんの華花さんの生き方を見て人生が変わっていくおはなしです。

私はまやと似たような経験をしたことがあります。まやはホスピスの

談話室で華花さんが

「ピアノをひいていいんだよ。」

と言ってくれたのに、まやは

「ひけないうし、こんな所でひくなんてせつないやー。」

と言ったことわってしまいました。同じように、私も、すくすくいチャ

ンスをのがしてしまったことがあります。今年の七月へうらひ、三人の

音楽の先生が授業をしに来てくれました。その時、担任の先生が

「ピアノをきいてもらうな。」

うろってくれたのに、私ははずかしくい、

「せつないやー。」

とことわってしまいました。私があの時ピアノをひいていたら、もっと

上手になるひき方を教えてもらっていたかも知れません。そう思うと私

は今でもこうかいています。

私が特に印象に残った場面は、ホスピスに行くときちゅうの電車で、女

子高生二人を華花さんが注意する所です。二人はマナーの悪いことをは

じめました。おけしゅうや大きな声でおしゃべりをしたのです。すると

華花さんが女子高生に言いました。

「みんなめいわくしているわ。」

その時、まやは、はずかしいと思って、一瞬うつむきました。私が華花

さんだったらこのような注意はできないと思います。人前に立って何か

を言うのは、にがてなので無理だと思いました。私もまやだったらはず

かしがると思います。華花さんの立場でもはずかしくて注意ができない

と思います。

私が一番華花さんがうらやましいなと思う所は、華花さんが自由に生

きている所です。

私は自分らしく生きたいです。それは、自分の好きなことを見つけて、

好きなことを自由にやることです。たとえば、私はピアノが大好きなの

で、私の好きな「カノン」という曲をひけるようになって、自由に楽し
く、リズム良くひいたりしてみたいと思います。

他にも、自由に自分のやりたいことをいっばい見つけられるようにな
りたいです。

私はこの本を読んで、私と同じ性かくの人もたくさんいるんだと思
いました。そして華花さんみたいな勇気があり、自由に生きる人にな
りたいと思いました。

【講評】 ウチゴウシ

登場人物の気持ちを自分の経験と重ね、よく考えることができました。自
分のやりたいことを見つけるために、たくさんのごことに挑戦してみてください
い。



★ 奨励賞

「大地震が学校をおそった」を読んで

鴛泊小学校 五年 松谷 まつや 実夢 みむ



この本は、一九八四年九月十四日に長野県で実際におきた、大地震の
お話です。この話は主人公の利加子が大地震によって友だちとはなれば
なれになったり、お父さんが行方不明になったりといろいろな悲しいこ

とおおきるなかで、校長先生や家族と支え合いながら前向きに生きていくお話です。

私が、この本を読んで一番印象に残ったのは、校長先生です。利加子の学校の校長先生は大地震でみんなが混乱するなかで、地震の後すくひなんの指示を自らしたり、お父さんが行方不明の利加子をはげましてくれたり自分だって大変なのにだれかのことを考えて動いていてすごいと思いました。私も校長先生のように困っている人がいたら、助けることができる思いやりの心をもった人になりたいとあらためて、思いました。

この本で起きた長野県の地震以外にも、今年におきた熊本県の地震でも、友だちとはなればなれになり悲しい思いをしている人や家がこわれてしまった人がいると思います。このような人たちも利加子のように地震のひがいに負けずに支え合いながら、復興に向かってがんばっているのかなと思い、私もがんばろうと思いました。

最後にこの本を読んで、私はだれかのために何かをすることの大切さを学びました。自分のことは後にして、他の人のために何かをする。おせっかいになるかもしれないけどさういった思いやりの行動が大切だとこの本が教えてくれました。



【講評】
ユフコウ

地震など災害が起きた時、どうするかを考えておくことは大切なことです。自分のことより、他の人への思いやりをもつことは、難しいけど大切なことですね。

小学校六年生の部

★ 優秀作

「きみが世界を変えるなら」を読んで



鴛泊小学校

六年

杉本 天河
すきもと てんか

「言葉は、きみが置かれている状況を変える武器になる。人生をひっくり返すくらいの力を持っている。だからこそ、言葉という武器を手に入れよう。」

この言葉は、この本の最後まで何回も使われている表現です。ぼくは初め、言葉で人をたおせるのかなと思いました。どうやったら言葉という武器を手に入れられるのかなと思いました。

ぼくは、五年生のおわりから、児童会長をやりました。全校朝会などで発表する時どつやって、伝えれば良いのか迷ったことがありました。わからなくなると、児童会の先生が作ってくれた原稿を読んで、発表していました。自分の言葉では何にも伝えることができていませんでした。でも、あいさつ運動のように、自分がやりたいと思ったことでは、堂々と発表できることもありました。

この本には、言葉で失敗したり、成功した人がたくさん紹介されています。その一人がサッカー日本代表の本田圭介選手です。

本田選手は、小学校の卒業文集に、将来の夢を書きました。サッカー選手になり、セリエAの十番になる、という夢です。

夢をあきらめないということは大切ですが、作者はそうは言っていません。自分の気持ちから目をそらし、だまることがせず、むしろそれを言葉にすることが大切だと言っています。卒業文集という作文に書き残

すことので、決意をまわりの人に伝えた本田選手のすこさが分かりました。ほくも、三学期には卒業文集を書くと思います。そんな時には、本田選手のおひひ、自分の気持ちを自分の言葉で表せるようにしています。でも、まだ何を書へか決めていません。三学期まで考えながら生活したいと思っています。

もうひとつ、心に残ったことは、イチロー選手のエピソードです。それは、ふり子打法を認めてもらうために、「ローチにちゃんと説明し理解してもらったこと」です。イチロー選手のおひひなすこい人でも、自分の言葉で、人に理解してもらおうと努力をしなければならぬこと、ということ。ほくも時々、友達に分かってもらえないなと思う時が少しあります。ほくが「静か」にして、「と言いつても全く静かにしてもらえない時です。ほくと同じく、この本には、理解してもらおうとをめざらめた人が紹介されています。

でもイチロー選手のように、「わかってくれない。」と思うのではなく、「どうすればわかってもらえないのだろうか。」と考えることが大事だと思います。

この本を読み終えて「言葉は、いまの悪い状況を変えるための武器になる。」と思いました。だからこれから悪い状況になってもあきらめず、自分の言葉で話して、理解してもらおうとがんばります。

【講評】

作者の意図を理解してしています。自分の経験を振り返り、次への意欲につながる言葉がいろいろあります。

言葉は自分の気持ちを伝えるための大切な武器がいろいろあります。



★ 佳作

「マッチ箱日記」を読んで



利尻小学校 六年 熊谷 宙大

「マッチ箱日記」と初めて聞いたとき、ほくはマッチ箱に日記を書くものだと思いましたが、それは違いました。マッチ箱日記とは、少年の「こは読むことも書くこともできなかつたひいおじいちゃんが、マッチ箱の中に、その日の思い出の「も」をいれているお話です。

ほくがマッチ箱に入っていた思い出の品の中で特に心に残った物は、オリーブの種です。

このオリーブの種はひいじいちゃんが少年の時、母親に「なめてね」とわたされた思い出が入っていました。ほくはそれを見て、ひいじいちゃんは昔、貧乏な家に生まれ育っていたことがわかりました。なぜならおなかですいたときにオリーブの種をなめることしかできなかった生活が伝わったからです。でも、その思い出を残すことで、ひいじいちゃんの少年のこころの思い出を、自分の子ども達に見せてあげることができました。

ほくが思い出を残すとしたら、保育所から帰るといって、母と一緒に拾った桜の花びらをマッチ箱の中に入れてたいです。今は、あまの母と一緒に歩かなうので、良い思い出です。

ほくは、この本の作者が一番伝えたいことは、「その日のことを大切にしよう」ということだと思います。たぶん、読む人も書く人もみんな同じで、日記を作るひいおじいちゃん。だからその日のことを思い出すひいおじいちゃんかひいおじいちゃん。

ほくは物を残すことばかりかいらとは思って、日記を作ったその日の思い出を残したり、思い出を話したりするのよかったです。と思いました。



【講評】

文章構成をきいて書きました。ありがとうございます、自分の経験、作者の思い、まとめ、と書いています。

思い出を大切に一日一日を大切にしてください。

★ 佳作

「百年後の水を守る」を読んで



鷺泊小学校 六年 松倉 健登

ほくはこの夏、「百年後の水を守る」という本を読みました。どうしてこの本を選んだかというと、最近水の使い方が悪いの、これから使う水を守るの、自分達に何ができるか、考えられないかという理由で、この本を選びました。

この本を読む前、ほくは、水を無駄使っていました。例えば、歯みがきをする時、水を出しっぱなしにしたりして、いろんな場面、水を無駄使っていました。水がなくなると困ったりしたことがないので水に対しての意識が低かったです。

あと、世界には、水で困っている人がたくさんいると言っていることも知り

ませんでした。

この本で、筆者が伝えたかったのは、まず、水を大切にすることです。なぜかという、人間は水を飲んだりして生活しているのに、その水を捨ててしまうなんて、もったいないと思うからです。

もう一つ伝えたかったと思うのは、水を大切にすることは、食べ物も大切にしていると、いうことです。

理由は、動物や、植物が育つには、たくさんの水を使います。その動物や植物を食べているからです。それに、加工食品を作る工場の機械を洗うのに、たくさんの水を使うから、水を大切にすることは、食べ物も大切につながると思ったからです。

この本で心に残った場面は、一日五〇リットルの生活を体験する授業です。

どうして、この場面が心に残ったかというと、世界で、水を一日五〇リットルも使えない人達のことを考えて、水の授業に参加した人達が、一日五〇リットルと、使える水を制限しているからです。でも、みんな水の大切さを知って、水の使い方を考えているのが、一番心に残りました。それに対し、ほくは、水出しっぱなしにしたり、捨てたりして、水を無駄使っているの、水の使い方を考えるべきだと思いました。

ほくは、この本を読んで、水に対しての意識が変わりました。あと、世界には、水で困っている人達がたくさんいるのだなとわかりました。そして、ほくは、水に恵まれているこの日本に生まれてよかったなど改めて思いました。だからと言って水を出しっぱなしにしたり、捨てたりして、無駄使いをしないで、水の授業のように、水の大切さをたくさん知り、「百年後の水」を守りたいと思います。



【講評】

本を読み、自分の生活を振り返り、これからの生活に生かしていくことについても大切です。世界に目を向け、自分の国のいよみを改めて考えられたらいいと思います。

★ 奨励賞

「チロヌップのきつね」を読んだ



鷺泊小学校

六年

神成

燎

ぼくが、なぜチロヌップのきつねを読んだかという点、文化委員会も、書きおもしろいと思ったというのもあるけれど、一番の理由は、一度パラパラとページをめくって見てみるうちに感動が伝わってきたからです。ぼくが一番感動した所は、二二頁です。

二二頁は、父ときつねの死後、母ときつねの子どもの愛情です。この時ぼくは、自分が母ときつねだったように感じました。母ときつねの子どもの愛情が改めてわかりました。

二二頁は、父ときつねの家族への思いです。父ときつねは、自分たちが生きていくために軍隊から守るために自分から軍隊にむかって二二頁にきました。

ぼくは、この父ときつねのゆうじょう、むねが熱くなりました。このことからぼくは、次のことを思い知らされました。

一つ目は、自分が大人になっていく中で、色々なことが起き、それをのこえて大人になっていくことです。

二二頁は、大人になっていくことです。

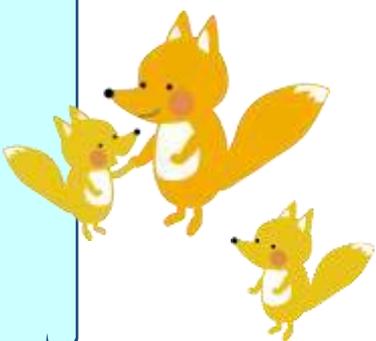
自分が大人になり、だれかとけんして子どもをうんだとしたら、この父ときつねのように、自分の命をかけて、その子どもを守っていくなければならぬということです。

三三頁は、どんなに苦しいことがあっても、めんどくさがらずにやり続けて、その後の喜びや、やりきった感覚を、自分の体で感じるということです。

作者が言いたかったことは、
「大人になってからの、子どもへの思いやりや、家族への思いやりを大切にしようということです。」

二二頁は、チロヌップのきつねをよんだ感想は、父ときつねと、母ときつねの、子どもや、家族へのやさしさや、思いやりの気持ちに感動しました。

その時の、子どもきつねの、母さんからの思いやりに対して、まだ幼いころなのにちゃんとおいをいっていた所に感動しました。
みなさんも、感動あふれる、このチロヌップのきつねをぜひよんでみてください。



【講評】

家族への愛に感動したことが伝わります。自分の家族のいよみを考えられたと思います。

たくさん良い本に出会って、友だちにも紹介しよう。

中学校の部

☆ 優秀作

「世界から猫が消えたなら」を読んで



鬼脇中学校 二年 寺島 凧咲

世界から猫が消えたなら、この世界はどう変わるのだろうか。世界から僕が消えたなら、一体誰が悲しんでくれるのだろうか。このセリフが私の心に残っています。

私は猫が好きです。表紙に猫の写真が使われていたのがきっかけで、この本を読んでみました。表紙と内容の間にはかなりギャップがあり、私は衝撃を受けました。

この本の内容は、余命宣告をされた主人公が悪魔に出会い、世界から一日一つ何かを消すこととひきかえに自分の寿命をのばすという契約をすることから始まる、不思議な一週間のお話です。私はこの本を読んで、二つのことを考えさせられました。

一つ目は、自分の命の意味についてです。この本の中で、主人公は最後に自分が消えることを選びます。私が主人公の立場なら、絶対に自分の命を優先すると思いました。なぜなら、自分の命よりも大切なものはないからです。何よりも、私には消える勇気がありません。なぜ消えたくないと思っただろうと思っただろうか、二つ目に考えさせられたのが、後悔についてです。私が消えたくないのは、このまま消えることとくさんの後悔が残るからだと思います。ですが、後悔を完全になくすることはできませんのでしょつか。できなうと思ひます。私はまだ十三歳ですが、現時点でもたくさんの後悔があります。なので、全ての後悔をなくするのは不可能で

す。この主人公のような決断をできるようにするには、できるだけ後悔を減らさなければいけません。後悔を減らすためには、自分の今やるべきことを優先しなければならぬと思います。

人は、一番大切なことをあとまわしにしていまいがちです。もしかしたら、明日家族に一生会えなくなるかもしれない。なので、毎日感謝を伝えることが、後悔を減らすことにつながる。私は思います。自分の伝えだかつた気持ちを照れくさくて伝えられず、この思いを自分の中にしまったまま、自分ごと消えてしまつことが一番の後悔だと思つからずです。自分の気持ちを伝えることで、自分自身が消えても自分の気持ちだけは、大切な人の中に消えずに残ります。それだけで後悔はほとんど消えるのではないでしょつか。他の後悔なんて小さくみえるのではないでしょつか。「ごめんなさい」「ありがとう」「難しいことではありません。ふだんの生活で、少し素直になればいいだけだと思います。

この本を読んで、少し素直になるだけで後悔を減らすことができ、自分の思いが残せるということがわかり、世界から消える日がくる恐怖心が少しなくなりました。今では自分が消えることを選んだ主人公の気持ちかわかる気がします。主人公は自分が消えることを選んだわけではなく、自分の思いを残すことを選んだのだと思います。

私が世界から消えたとき。少しでも多くの人の心に、多くの自分の思いを残せるように、これからは少し素直になってみようと思います。



【講評】

もしも自分が明日世界から消えたなら、一体何を残すことができるでしょうか。もしも大切な人が明日世界から消えたなら、最初に何を思うでしょうか。私たちは目に見えないものはあてまわしにしています。それをこの本を読んで考えることができた寺島さんの文章は、とても美しく純粋で、感動を覚えます。

「後悔」は誰しもしたいものではありません、けれど、「後悔」をしないように生きるために何をしたらよいかわかることを、私たちはつい忘れてしまいます。寺島さんの感想文を読んで大事なことに気づかされました。

「自分の思いを残せるように」「これからの人生を大切に生きてください。」

☆ 優秀作

「おばあちゃんが教えてくれたこと」



鷺泊中学校 一年 山本 彩心

「西の魔女が死んだ」。これは、私を成長へと導いてくれた物語。中学生の「まい」という少女は、いじめを受けて不登校になってしまいました。そこで、母方の祖母「西の魔女」の家で生活することになり、まいはおばあちゃんから魔女の修行を受けます。その修行は、「早寝早起き。食事をしっかりととり、よく運動し、規則正しい生活をすること。」「そして」「何でも自分で決めよう」と。最初は簡単だと思いましたが、おばあちゃん「そんなに簡単なら僕が、一番難かしいよ」といふはなにか。と言います。私は休みの日に掃除機をかけていたの、タリタリ掃除機がの音がします。だから、おばあちゃんが言った言葉、よく聞いておこうと決心がはいってしましました。

さらに、魔女の修行で一番大切なことが、「自分で決めたことをやり遂げる力」だそうです。まいは、自分で決めたことを実行し、おばあちゃんのもとを離れた後も続けました。私は誰かに言われて動くことが多いです。しかし、まいが成長していく姿を読んで、「このままではいけないと思うようになりました。私も、魔女の修行を実行することです。」「自分で決めたことをやり遂げる力」を身につけていきたいです。おばあちゃんは生きていくために大切なことを、魔女の修行を通して教えてくれたのだと感じました。

そして、死んでしまったらどうなるのかを話し合っている場面もありました。まいは小さい頃にパパから「死んだらもう最後の最後なんだ。自分が死んでも、やっぱり朝になったら太陽がでて、みんなは普通の生活続けるんだ。」と言われて、悲しくなった思い出がありました。でも、私はまいのパパとは考えが違います。残された人は亡くなってしまった人の思いやぬくもりが残っていると思っただけです。去年、私のおばあちゃんが亡くなりました。でも私は時々、おばあちゃんとの楽しかった出来事を思い出します。その時のおばあちゃんはいつも笑っています。だから、死んでも最後の最後ではないのです。まいのおばあちゃんも「死ぬという事は、魂が身体から離れて自由になること。」「と言っています。そして、おばあちゃんはいくなくなった時に、証明してくれました。まいは、おばあちゃんからの「あふれたばかりの愛」を実感します。私に、心が温かくなりました。私のおばあちゃんもきょうとじかで見守ってくれているのでしよう。そう思うと、おばあちゃんとの別々は悲しいことではないのです。

じつらりのように気付けたのは、この本のおかげだと私は思っています。自分で決めたことをやり遂げるように「規則正しい生活をすること。」「人の温かさ」を改めて実感しました。学び、目標ができて、知ることがたくさんあり、生きていくために必要なことを教わりました。魔女の

修行を実行し、まいのように私も成長するために、努力を続けたいです。これからの人生に今回学んだことをいかして、一歩一歩前進していきたいです。「この本に出会えて、よかった。」

【講評】

誰か「言われた通りに生きる」とは簡単だ。そのためには、少な〜とまんの「誰か」から否定されずに生きていけるからだ。
自分で「し〜し決定しながら生きていく」とは本心に難しいことです。だから「え〜」修行の「し〜し」になるのです。主人公まいのパパの考えは、「私は違う」とはっきり言ってきた山本さん。とうかその強い意志をもって、「これから生きていくって決めて。」



★ 佳作

「仕事オンチな働き者」を読んで

鬼脇中学校 三年 桜庭 ももか



「この本のはじめに、まずは頭の体操から始めよう。バカボンのパパと福山雅治には共通点がある。それは何だろうか。」とありました。著者の山崎さんがこの本を執筆した時点では、バカボンのパパと福山雅治はどちらも四十一歳だったそうです。笑えました。読書が苦手な私も読んでみようと思える出だしでした。

著者山崎さんは、有名百貨店で自分用に仕立てた同じサイズ・デザインのスーツを長く着ることが美学だと思っていたようですが、新たな視点や自分が気づいていなかった考えを知ることでも価値観がある日突然変わって、最新のデザインで既製品のスーツの方がイケてるように見えるようになったそうです。自分のことをファッションオンチだったと言っています。たしかにそういう事はあるなと思います。自分のこと而言うなら、私は髪の毛が乱れるのが嫌なので、前髪を後ろ髪と同じくらい長くしてストレートヘアにシンシとなるように毎朝念入りに直しています。結びときまきもちりまどめているので、これでメガネをかけると地味で真面目な感じな見た目に仕上がります。姉や母に「もっと可愛い髪型にしてみたら？」と言われていたけれど、自分ではこれが良いと思っています。ですが、この本の著者山崎さんのように、新たな視点や自分が気づいていなかった考えを知ることでも、今まさに価値観が変わり始めました。ヘアアレンジの本を見て、休みの日はあみこみなどをやっています。

自分がこれで良いと思っている時は、周りの言葉が正しかったとして

も響いてきません。人に言われてではなく、自分でそう気づけた時に「変えていこう」と初めて思えるのだと思います。テスト勉強も、親にいくら言われてもやる気が起きないけれど、自分で「やらなきゃ」と思った時には行動にうつせたりします。部活を引退し、今は受験生の私。自分でスイッチを入れて受験勉強をがんばります。



【講評】

「自分がこれで良いと思ってる時は、周りの言葉が正しかったとしても響いてきません。」この桜庭さんの一文に感銘するのはなにかとゆいかな。これを導き出した「ゆい」さん、この本を読んだ価値があるのだと思います。大人でさえこの考えに気づける人はなかなかありません。読書に向き合う事で、こんな風に考えることができたことはとても幸せなこと。これからの桜庭さんの人生を豊かなものにしていくれると思います。

「ゆい」さんからゆいの言葉を胸に、自分のスイッチを入れてたゆいのように挑戦していきましょう。そして、ゆいさんへの本との出会いを大切にしようねからませ言葉を添っていきましょう。

★ 佳作

「西の魔女が死んだ」を読んで



鬼脇中学校 二年 門脇 あかね

疲れたことは、ありますか？激しい運動をした後などは、とても疲れたいですよ。

でも、ここで私が言っているのは、「身体的疲労」ではなく、「精神的疲労」です。

友達？グループ？人間関係？ああ何もかもが煩わしい。どうせ上辺だけで、何か起きたらすぐに仲間売れる位なのに、何ですか？友達って。

そう思ってしまう程、小学生の頃の私、特に四年から六年の中盤の頃の私は、精神的に疲れていました。

「クワスの最初にバタバタって幾つかのグループができるんだ。……」「その波に乗ったらそんなに大変じゃないんだよ。最初気の合いそうな友達のグループに入るまでがすごく気を遣うけれど。……」

この物語の主人公、まいも、私のように人間関係に疲れていました。小学生という時期から考えると、中学生のまいより私の方が、疲れは酷かったかもしれません。

小学生の頃の私は、極力波風を立てないように相手に合わせるように気を遣い、軽口でさえも真に受けて独りで勝手に傷んでいるような、一言で言えば「疲れやすいタイプの子」でした。

そんな性格もあって、主人公のまいの思うこと、感じていたことは、胸が痛くなる程激しく共感できました。

そして、そんな私が精神的疲労から脱出できたかどうかと、簡単に言えぬ「逃げた」のです。「逃げた」ゆいさんの「闘わぬ相手」に合わせ

「という方が正確かもしれません。私の場合、女子より男子の方が気が楽だったので、男子と話すようにしたのです。」

女子が男子とばかり話していると、「男好き」などと陰で囁かれることも少なかつたのですが、幸い私は、話しかける頻度やバランスが良かったのか、そう言われることもありませんでした。また、そうしているうちに、女子と話すのにも気をあまり遣いすぎないようになれるようになりました。

私と似たような境遇にいたまいは、自分の祖母の家で一ヶ月あまり過ごし、転機とも言える転校によって、辛い人間関係から脱出します。

「転校」というのも、脱出する一つの方法論として大いに使えると思います。私もあのまま中学校と同じ人達と進級していたら、最悪心が病んでしまっていたかもしれません。

私は鬼脇中学校に転校してきて、本当に良かったと思います。



【講評】

主人公まいの置かれている状況と自分を重ね合わせ、自分が乗り越えてきたことを振り返ることが出来る。このような読み方ができることも、読書の楽しみの一つですね。辛かった経験を自分の中で昇華して素直に文章にできるところが、門脇さんの感想文の魅力的なところだと思います。「この本は共感もしやすく、感想文としては書きやすい本ですが、ただ共感するだけではなく自分の生き方に切り込んだ、深い文章だと思います。」

これからも様々なタイプの本を読んで、世界を広げていってください。きっと門脇さんなら、どんな本を読んでも人の心を惹きつける文章が書けると思えます。これからも期待しています。

★ 佳作

「明日への一歩」

私には自由につかえる両手があり、どこにでも歩いていける足があります。もし自分の体の一部を失ったら、どんな精神状態におちいるのでしょうか。

この本の作者、パラリンピック・アスリートの佐藤真海さんは大学時代に右足に骨肉腫がみつかり足の半分を失いました。失ったショックでたくさん壁にぶつかりましたが、さまざま困難を乗り越え、新しい人生を歩み続けます。この本は、そんな真海さんが私たちに生きる意味を教えてくれる感動の手記です。

真海さんはスポーツが大好きでした。これからの大学生活を誰よりも楽しみにしてきた真海さんですが、長期にわたる闘病生活のため、満足



鬼脇中学校 一年 箕輪 萌華

に学校にも通えず全ての事をあきらめなくてはなりません。現実
はそうあまくはなく、周りはみな健常者ばかり、真海さんは義足とい
うハンディを背負って車イス生活の毎日。初めて障害という壁にぶちあた
りました。その壁をぶちやぶったのは、共に病氣と闘った仲間との時間
共感できるからこそ、思いが伝わる事ができる。この出会いがあった
から真海さんはポジティブに人生を考えられるようになりました。

私は彼女の姿を見て、気づきました。リハビリや薬が病氣を治す全
てではないということ、そして仲間からもらったエールが何よりも彼女の
励みになったのではないかと感じました。

私は真海さんと同じく難病を抱えました。病氣を患った一人として、
この本から生きる勇気を教わりました。再発することに病氣に対する不
満感を感じ皆と同じ生活を送れない自分が大嫌いでした。しかし真海さ
んの一言が心に響きました。

「神様はその人に乗り越えられない試練は与えない。」

だから私は思います。この病氣は必ず乗り越えられることを。そして
この経験をしたことにより新しい人生の扉を開けたことに感謝していま
す。私達が授かった命は神様からの贈りものではないかと思えます。
共に笑い、共に泣き合い、一日を共に過ごしてきた仲間達。命を救っ
てくれたスタッフの皆さん。この人達のおかげで病氣を患っても、私の
小さな心臓が一日一日を懸命に動いてくれることに感謝していま
す。

そしてこの一冊は、私の人生のバイブルとなりました。私も真海さん
のように周りにエネルギーを与えられ、輝いた人間になり、夢を広げて
一度きりの人生を歩んでいきたいと思えます。

【講評】

箕輪さんの「人生のバイブル」となった素晴らしい一冊。たった一度き
りしかない人生をどう生きるのか。神様はなぜ自分にこのような試練を与
えたのか。そのような大きな人生のテーマを考えさせられる一冊です。大
学生という若さで右足の膝から下を失ったパラリンピアの佐藤真海さんの
生き方と自分を重ね合わせ、新しい視野を広げられたことは、読書の大き
な喜びの一つでしょう。

箕輪さんが感じたこと、得たことを、ぜひこれから多くの人に発信
していただきたいと思います。佐藤さんの生き方が、箕輪さんに勇気を与えたよ
うに、箕輪さんの生き方がたくさんの人を救う、そんな未来を期待していま
す。



★ 佳作

「戦争がなかったら」を読んで

鷺沼中学校 三年 蛸島 菜奈子



私が、この本を読んで感じたのは、

「平和に暮らしていることのありがたひ」

「生きていられる幸せ」

私には、画腕がありません。画足がありません。家族がいます。友達がいます。将来の夢もあります。なにより、生きています。ですが、この本に書かれている子どもたちは、右手を砲弾によって失っていたり、家族を戦争で亡くしていたり、戦闘に行く前に酒を飲み、ドラックを吸うことよって気分を上げ、人を殺すことへの恐怖心をなくしていたのです。

私は、この本を読んで「普通の暮らし」について考えさせられました。平和なことがあたりまえであるかのように暮らしてきましたが、それはとても幸せなことだったのです。

この本に書かれている、モモという男の子が初めて戦闘にかりだされたのは十一歳の時でした。十一歳といえば、小学校五年生か六年生です。まだ小学校高学年の子が銃を持って戦っていたという事実、私はとても衝撃を受けました。自分よりも年下の子が戦闘にかり出されるなんてこと、考えられなかったからです。もし、自分がモモの立場だったら、本物の銃を持つということと比べできないと思います。ましてや、銃で誰かを撃つなんてこと絶対にできません。それでもやらなければいけないのが戦争なのです。

戦争はムスという六歳の少女から右手をつばいました。砲弾によって

ひきちぎられてしまったのです。利き手がなくなるといのは生活していく上でとても大変で不便だと思います。それでもムスは腕を失ったことなど感じさせないくらい元気に近所の子たちと遊んだり、左手で字を書く練習をしたりと、私とは比べものにならないくらい強い心を持っていました。私は、嫌なことがあったり、うまくいかないことがあるとすぐ落ち込んでしまいますが、ムスという少女を知って、何かが自分の中で変わった気がします。ちょっとくらい嫌なことがあっても前向きに考えてみよう。この本は私にそう思わせてくれました。

今、私たちは本を読んだり、テレビを見たりすることでしか戦争について知ることができませんが、色々な人に戦争についてもっと知ってもらいたいと思います。私たちが生まれる前に、こんな残酷なことがあったということ。そして、戦争によってあらゆる物を失ったとしても、めげずに懸命に生きている人がいるということ。もしかしたら、私のように一冊本を読むだけで自分の中の何かが変わるかもしれない。

私も、もっと戦争の本を読んで、戦争について知りたいと思います。そして、平和に暮らしている幸せ、家族や友だちがいる幸せ、学校に通える環境がある幸せ、生きていられる幸せを感じながら生きていきたいと思えます。

私に大きな影響を与えてくれたこの本に感謝したいです。
この本に出会えて、本当に良かったです。



【講評】

この本と出会わなければ、世界でこんなことが起きているなんて知らなかった…と、本との出会いで、自分が普段いかに狭い世界で生きているのか、思い知らされる時があります。ですが、思い知るチャンスが巡ってきただけで、それはすでに幸運なことなのだと思います。良い本と出会えてよかったですね。

★ 佳作

「ありのままの自分」



鷺泊中学校 一年 渡邊 野乃

突然、自分の親友が死んでしまったら、私はどうするでしょうか。

私は、『少女』という凄かなえさんの本を読みました。この本を読んだのは、人が死ぬ瞬間を見たいという、変わった女の子が主人公だったからです。その女の子が、死とはどういうことかを探し求める姿に心惹かれました。

私がこの本を読んで心に残った場面は、主人公の由紀が、余命がわずかな男の子の願いを必死に叶えさせてあげようと努力している場面です。私は、あれほど人に対しての思いやりのなかった由紀が、自分の意志で行動している姿に、とても感動しました。由紀は、実は優しく、自分を持っていく人なんだとそこで確信しました。

また、由紀が過去の自分を振り返り、情けなくなったり場面も心に残っています。この場面を読んで、由紀の心の成長を感じました。私も、小学生の頃はとてもあばれていました。ですが、今になって情けなく感じ

ます。何故あんなことをしたのだろうと思ひ、笑ってきます。もしかしたら、由紀も同じ気持ちなのかもしれません。

次に、私が残った場面は、以前まで由紀が今の性格と正反対だったことです。どうして性格が変わってしまったのか、そのときの由紀の心情はどうだったのか、もじりり由紀がいたらぜひ聞いてみたいです。私は、大幅に性格が変わったことはありませんが、自分で成長したと思う時がたくさんありました。そのように由紀も、自分が違う方向に性格が変わっていったのを気付いているのだと思います。気付いていたら何故、方向転換をしなかったのでしょうか。「口に出さずに思いを伝える難しさ」と誤解についてという文を由紀が書いていました。由紀は、自分の思いを文章にするのが一番伝わる方法だったのです。私は、この場面を読んでとてもおどろきました。私はこのように、書いて自分の感情や思いを伝えることが苦手です。なので、とても由紀のような人にはあがれています。

この本から、私は自分らしく生きることを考え、何事にも諦めずに挑戦することの大切さをたくさん学びました。何かを始める前に、すぐに諦めるのではなく、「やってみよう」、「頑張ろう」という気持ちを持ち、由紀のような心に強い芯をもっている人間になりたいです。もし、このお話に「つぎがあるのならぜひ読みたいです。由紀は、このお話の中でこのようなことを言っていました。

「死と簡単に口に出せる人は、実際に死とならあわせになった経験がないからだ。」

と書いていました。私はこの由紀の言葉には、すごく同情します。なぜかという、死とはものすごく残酷なことであり、縁起の悪いことなのです。何のために生まれてきたかを、考えさせられる小説でした。これからは、私も自分の長所と短所を見つけ、ありのままの自分を堂々と出せるような人間になりたいと、心から思いました。

【講評】
「人が死ぬ瞬間を見たい」という感覚は、あまり多くの人の共感を得られないもののように思います。「この作品全体を支配しているのは、その感覚」代表される「異常な」です。そこが作品の魅力でもあるわけですが、渡邊さんの視点からとらえ直したこの感想文は、多くの人が共感できる内容だと感じました。



★ 奨励賞

「リットルの涙」を読んで



鬼脇中学校 一年 小野寺 百花

皆さんは、自分の人生を「つまらない」「もっと自由になりたい」などと思った事がありますか？この言葉を聞いて少しでも共感できた人に読んでほしい。一冊の本があります。

『リットルの涙』、聞いた事がある人も多いのではないのでしょうか。この本に出てくる亜也さんは、十五才という若くして難病と戦います。背髄小脳変性症という重い病気です。この病気の残酷な所は、知能は変わらないのに体の自由がどんどん奪われてしまい、昨日できていた事が今日できなくなってしまう所です。こんな日々が続いたら、今日できる事も明日できなくなるかもしれないと、こわい思いをします。あたりまえが少しずつあたりまえではなくなり、中学三年生、高校へと期待を膨らませ輝いていた未来が、病気とともに過す日々が変わってしまいます。とても苦しくてかわかたと思います。私は健康で、骨折や病気になった事さえないので、今までどんなに障害や病気について学んできて亜也さんの気持ちや全てを理解する事はできませんでした。けれど、もしも私が亜也さんのように体が不自由になってしまったら、辛くて、もっと皆と同じようになりたいと思ってしまうと思います。それなのに亜也さんは、いつも笑顔で家族に心配をかけないようにします。私はすごい人だなと思いました。

最初に問いかけたように、私は人生を「つまらない」そう思っていました。人には言えない悩みや不満もあります。現実は何でもうまくいくわけではないので、夢を見る事すらできません。そんな事を考えると涙を流す日もありました。そんな時この本と出会い、自分の人生を「つまらない」、そんな風に生きていける自分が、ばかりに思えました。私が生きていく意味なんてないのではないかと。そう自分に問いかけていた自分が昔いました。けれど亜也さんは人生を必死に生きようとしていました。その事を思うと、胸が苦しくなります。生きていく事、生きていくだけで素晴らしいんだ。リットルの涙はそれを教えてくれる本だと思います。たとえ亜也さんのようにどんなに辛い状況でも笑顔で生きればそれだけで素晴らしい。そんな風に思えるような新しい人生の一步をこの本を読んでふみ出してみませんか。



★ 奨励賞

「シリョクケンサ」を読んで

鷺泊中学校 二年 山本 奈央



私は、この本を読んで、学んだこと、感じたことがあります。それは、大切なものを失ってしまった時の気持ち、あたりまえのことがどれだけ幸せかです。

主人公の鈴木翔平は、幼いころ、父親の事故死をきっかけに孤独な生活を通し、本心が言えなくなった少年です。

父親がいない生活は、とても大変だと思いました。

そして、翔平君の母親は病気で、父親がいない中、看病したり、家事をしたり、学校に行ったり、そんなことを小学生からしていて、私には無理だと思いました。

けれど、世の中の母親は、それがあたりまえだと思います。

朝早く起きて、朝ごはんを作り、仕事へ行き、疲れている中、夕食、家事、子どもの面倒、自分の時間は少なくなるのに、ここまで育てくれた母親、父親がいること、家族がいることは、ものすごく私は恵まれていて、ものすごく楽な生活ができていたんだと、家族はとても大事な存在だと、一人でも欠けてはだめだと感じました。

なので私は、翔平君がすごいと思いました。

高校生になった翔平君は、人生初めての友達ができ、そして、バイトが同じ子と付き合うことができました。

友達がいることは、あたりまえだと思っていました。なんでも話せて、なんでも言い合える友達のことを、あまの考えたことがありませんでし

【講評】

生きるという事は、簡単なことではありません。自分の生きる意味を考えたり、悩み、苦しみ、辛くなることもあつてしょう。けれど、生きていくことにはそれだけで意味がある。それに気がつかせてくれたこの本は、小野寺さんによってかけがえのない出会いとなったこととしょう。

難病を抱えた亜也さんの生き方から学ぶべきものはきっと、子どもであれ大人であれ少なからずあるのではないしょう。けれど、本を読んだ後の感じ方は、人によっても年齢によっても違うものです。今この瞬間に感じたその気持ちをおぼえず、小野寺さんの理想とする「素晴らしき未来へ歩み出してください。

た。友達もやっぱり家族と同じで、大切な存在なんだなと思いました。

だが、この後、翔平君に悲劇が待ち受けていました。母親の病気が急に悪化したのです。

私の母親が病気になる、さらに悪化したらと考えるだけで、涙が止まりません。

翔平君は、「孤独だ」「一人だ」と思っていました。そんな時助けたのは、友達と、彼女でした。

助けてくれる人、支えてくれる人がいるということは、応援されている気がします。

私の入っている部活の顧問の先生は、いつも、

「部活を支えてくれている、まわりの人への感謝。」
と言います。

本当に、忘れてはいけない言葉だと思います。

人間は支え合い、生活しています。一人だとできないことは、まわりの人の力を借りて乗り越えて生きているんだと私は思います。

翔平君の母親が、息絶える時言った言葉、

「翔平は一人じゃない、翔平を支えてくれる人は絶対いる。」
と言いました。

私のまわりに支えてくれている人がどれだけいるか、考えてみました。きつと数えきれません。私の知らない人、地域、国で支えてくれる人が絶対います。

私はこの本と翔平君に、たくさん大切なことを教えてもらいました。

翔平君の人生で、私にはとても耐えられないことがいくつもありました。それを乗り越える翔平君がかっこいいと思います、大切な人を失うということ、

とは、自分の一部を失うことと同じだと思います。

私は、あたりまえを喜べる、感謝できる人になりたいです。

【講評】

自分という人間が、知らず知らずのうちに大勢の人間に支えられて生きているという事実。そのことに、私たちはなかなか気付くことができません。不満ばかり口にしてしまいます。山本さんは、本や、まわりにいる人の言葉から、そのように気付くことができました。それは、とても幸せなことです。



『審査を終えて』

第三十回読書感想文コンクール審査委員長

鬼脇中学校 野呂田 大輔

何のために読書感想文を書くのだろう。

そんなことを、思ったことはありませんか。

私は、あります。

夏休み最終日に、泣きながらやっとのことで感想文を完成させる—これは私の思い出ですが、みなさんにも、そんな思い出の一つや二つ、あると思います。特に、ふだんあまり本を読まない人にとって、読書感想文は憎むべき相手かもしれない。では、読書感想文は、そんな思いをしてまでやるべきことなのでしょう。私は、「そんな思いをしてでもやるべきこと」だと今は思います。

人は、たった一度きりの自分の人生を生きるしかありません。他の人生は選べませんし、誰かと交換もできません。

ですが、本の中なら。主人公になりきり、誰かの人生を体験

できます。本の中なら。遠い国にも行けますし、世界のどこにもない「空想の世界」を楽しむことができます。

くりかえしますが、人は一度きりの自分の人生を生きるしかありません。時間も限られています。本との出会いを通して、自分の人生を豊かなものにしてほしいと思います。読書感想文を書くことが、ふだん本を読まない人にとって数少ない本との出会いの場になるのなら、こんなに素晴らしいことはありません。



【第三十回 読書感想文応募校と応募数】

■小学校一学年の部

鷺小 十八点
利小 七点

■小学校五学年の部

鷺小 十四点
利小 七点

■小学校二学年の部

鷺小 十七点
利小 五点

■小学校六学年の部

鷺小 二十二点
利小 三点

■小学校三学年の部

鷺小 十八点
利小 四点

■中学校の部

鷺中 四十五点
鬼中 十六点

■小学校四学年の部

鷺小 二十五点
利小 六点

小学校計	：	百四十六点
中学校計	：	六十一點
合計	：	二百七点

【審査の先生】

鷺泊小学校・・・高橋 寿規 先生
利尻小学校・・・柳 田 恒 先生
鷺泊中学校・・・倉 惠子 先生
鬼脇中学校・・・野呂田 大輔 先生

●平成二十八年年度

第三十回読書感想文コンクールを終えて

読書感想文コンクールに、応募していただいた小中の児童・生徒の皆さん、ご協力ありがとうございました。

また、各学校の校長先生はじめ諸先生方には、作品の取りまとめ、審査等、お忙しい中ご協力をいただきまして、厚くお礼申し上げます。

この作品集は職員による手作りですので、読みにくい点もあると思いますが、ご理解を承うください。

今後とも何かとご指導、ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

平成二十八年十二月発行

利尻富士町教育委員会鬼脇公民館



いざ、読書。

2016 第70回
読書週間標語